

インドと日本の交流

インドと日本のホメオパシー交流は、2001年のインドの大地震の際に日本がインドから緊急のホメオパス派遣要請と地震被災時の恐怖がトラウマやPTSDなどの心の病に発展しないよう、アコナイトというリカプトのホメオパシーレメディーの支援要請を受けたことに端を発します。当時は日本にはJPHMAからホメオパシ ン国際協会、由井寅子会長が設立したホメオパス養成専門校の1期生10名が卒業したばかりだったので、国産レメディーの製造設備も十分でなかったため、まずは被災地でレメディー購入資金をJPHMAから送ったのが始まりでした。そして、2005年3月に由井氏がニューデリー首長ディクシット女士と面会し、スマトラ沖地震による津波の義捐金としてJPHMAから5588US\$をインド政府に手渡しました。インド政府のホメオパシー研究部を訪問し、ホメオパシー先進国のインドから日本政府への働きかけの要請、ネルイホメオパシー医学大学病院を訪問(費用は国が負担)、1日1000人近い人々が治療に訪れる現場の見学、インドで著名なホメオパスと由井氏との共同ケースイイクなど充実した交流となりました。その後定期的にインドを訪問したり、日本にインドの著名なホメオパスを招聘したりなど交流を深めていき、世界最大の発行部数をほこるインド発行のホメオパシー学術誌「The World of Homeopathy」でも由井氏のZEMメンツの症例が紹介され話題となり、同誌の国際アドバ イザーとしても紹介されています。そして、

2013年10月にはカレッジ・オブ・ホリス ティック・ホメオパシー (CHOM) のインドスクーリングと第1回日印ホメオパシー国際カンファレンスの開催となりました。インドスクーリングにおいては、インド政府のホメオパシー推進組織、ホメオパシー中央評議会 (CCH)、ホメオパシーリサーチ中央評議会 (CCRH) の訪問やコロコメ、ホメオパシ ン医学大学病院、ホメオパシ ン研究センターの見学を行いホメオパシ ン臨床の状況や大学で学ぶ様子体験しています。また、3日間の第1回日印ホメオパシ ン国際カンファレンスは、世界的なホメオパシ ンの大家 フアロック・マスタート氏、米園国立がん研究所が認め、がん治療で世界中の医療機関から注目されている「バナジー・プロトコル」の提唱者であるバナジー親子などインドを代表するホメオパスが集結、日本からは由井寅子氏をはじめとする日本のホメオパスたちが、日本発のZENメンツ(三次元処方)を使った症例を次々と発表、両国の文化交流なども充実し、大成功の裡に修了しました。そして、日本国内でも、第14回JPHMA コングレスに、CCRH長官のマンチャンドラ氏が参加され、学術発表をされたほか、そのコン グレスの懇親会に、駐日インド大使館より、バンダ公使に来場したメッセージをいただきました。その後、ワドワ駐日インド大使より大使館へ、由井氏が招待され、インドと日本のホメオパシ ンの国際的な連携について



日本とインドのホメオパシーの交流について、駐日インド大使館に打ち合わせ。左からバンダ公使、JPHMA 由井会長、ワドワ駐日インド大使。



「バナジー・プロトコル」協定書を基盤とするケース・方法論として国際語医学会でも大きな話題となったコルコタのホメオパス、バナジー父子、その一家四代(150年)の臨床エッセンスを著すこととなり公開した本書が、由井寅子監訳で日本でも出版された(ホメオパシー出版)。



「発達障害へのホメオパシー的アプローチ」日印ホメオパシー国際カンファレンスでも、インドを代表するホメオパスの大家たちから高い評価を受け、インドで主筆のラシカルホメオパスたちからも伸びたいという声が届いている由井氏のZENメンツ。この本は91%に改善が見られている発達障害の子どもたちへの実部の症例が紹介されている(ホメオパシー出版)。

インドからアジアへ

さらに2015年2月にはインドと日本のみならず、アジア全体を巻き込んだホメオパシ ンのアジア大会、ホメオパシ ンアジアカンファレンスが開催されます。大会長は発起人のJPHMA 由井寅子会長が務め、インド政府と連携しながら進めている模様。人類の幸福のために、ホメオパシ ンにおけるインドの威光がアジア諸国を照らし出されることを期待したい。なお一般参加も可能とのこと。問い合わせはJPHMA 事務局までお問合せください。

日本ホメオパシ ン医学協会 (JPHMA) <http://jphma.org> E-mail: office@jphma.org TEL: 03-575-7411